変態と私

遠堂　沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変態と私

【Ｎコード】
Ｎ５９３８Ｐ

【作者名】
遠堂　沙弥

【あらすじ】
私の回りには常に変態さんが生息していた……。そんな変態さん達との出会いやエピソードを脚色することなく、書き綴りました。
＊妄想で終わる変態行為ならまだしも、行動に移せば立派な犯罪行為なので皆さんは絶対に真似しないでね＊

前書き

ここで紹介する内容は全てノンフィクション、私が体験した……もしくは目撃した本当にあったお話です。
現実にあったものなので、このお話を読み進める前にいくつか注意書きをしたいと思います。

☆全て私個人の視点です。
私が現実に体験した、あるいは目撃した変態達とのエピソードなので真実の程は定かではありません。
なので私個人の考え、思想、推察で書いていくのでこの話を読んでくださる方々の中には首を傾げてしまう内容、もしくはツッコミを入れたくなる部分もあるかと思われます。
ですが全ては過去の話、今更何を言われようとも「はい、そうですか」としか言えないことをご了承くださいませ。

☆内容によっては過激な表現となる部分がありますので、注意が必要です。
出来る限りやんわりとした表現方法にいたしますが、出来る限り如実に伝えていきたいので限界があります。
なので少しでも気分を害したら読むのをおやめください、責任は一切負いかねます。

☆物語は基本的に体験した順番に書いていきます。
なので変態レベルが徐々に上がっていくわけではなく、最初から飛ばしてる変態さんもいらっしゃいます。

後半で生温い変態さんも出てきますが、ご了承ください。
ちなみに一人だけ例外がいます。
それはこの私を「変態なしでは生きられない人生に変えてしまった」という、きっかけを与えた人物とのエピソード。
私の人格すらも大きく影響するので、この人物とのお話だけは一番最後に持って行きたいと思います。

☆過去になる程、うろ覚えに……。
きっと「過去の汚点は早く記憶から抹消したい」と考えた結果なんだと、そう信じたい……っ！
なので内容によっては結末が曖昧に片付けられているエピソードもあるので、ご了承ください。

以上の点を踏まえた上で、私が実際に体験した「変態とのめくるめくトキメキ体験」をどうぞ楽しんでいってください。

近所に住んでいた変態さん

この話は私がまだ小学校三年生の頃、九歳位だったと思います。
当時私が住んでいた場所は、私が通っていた小学校のすぐ裏手にある小さなボロアパート。
一階と二階に四部屋ずつ、六畳二間で風呂、台所、トイレ完備の……そんな小さなアパートに住んでいました。

そしてそのアパートの横手には普通の一戸建ての家が二軒ありました。
一番最初にお話しする変態さん、それはこの一戸建てに住んでいた一人の青年のこと。

彼は当時中学生か高校生だったと思われます。
つまり私より六～七歳ほど上でした。
彼の家庭環境は父、母、彼、弟の四人暮らし。
幼い私からみると普通の家庭。
家庭内暴力などといった問題があるようには見えない、そんなごく一般的な家庭の青年。
何が彼をあんな風にしてしまったのか……。

＊

ある暖かい日、つい先日まで凍えるような寒さだった冬が終わりを告げ、気候がとても穏やかになった春――――。
この気候のせいで彼がおかしくなったわけではない。
そう――――、彼は元々おかしかったのだ。

私はよく同じアパートに住んでいる隣人の双子姉妹と遊んでいた。

年齢は私より三歳下。
同じ学校に通い、学校が休みの日は一緒に遊びに出掛けたり、互いの家で色々な遊びをしていた。
そして今日も私はこの双子姉妹と、目の前にある小学校の裏門近くで遊んでいた。
異変は何の前触れもなく、何の脈絡もなく突然起きる。
まだ幼かった私達には予想することすら出来なかった。
例え彼が自他共に認める「奇人変人」であったことがわかっていても……。

私が通う小学校は休校日であろうと常に門が開かれていた。
広い運動場で遊ぶのは基本的に自由、さすがに校舎などの出入口には鍵がかけられていたが、例え土日であってもこの小学校の運動場には常に子供や大人がスポーツなどをして有効利用していた。
しかしその日に限って運動場にはぽつぽつとしか人が見当たらない。
私達は気分により運動場まで行って遊んだりしていたが、その日はたまたま人気が殆ど無い裏門で遊んでいた。
私と、双子の姉妹のアヤとミドリ。
特に何をするでもなく、門に掴まっては開閉したりして遊んでいた時だった。

突然ミドリの叫び声が聞こえてくる。
それは恐怖におののく絶叫ではない、ただ単にとんでもないものを見つけた時の、少し余裕のある叫び声だった。
ミドリの声でやっと気づく。
そういえば一緒に遊んでいたはずなのに、今までどこに行っていたのか。
少し目を離した隙にミドリの姿が見えなくなっていたことに今頃気付いたのだ。

声のする方へ視線を走らせミドリを探す私とアヤ、発見するのは容易だった。
なぜならミドリは全力疾走で私達の方へと走って来るからである。
私達は何か面白いものでも見つけたのか、こちらへ走って来るミドリに向かって手を振った。
するとミドリは泣いているのか笑っているのか、とても複雑そうな表情で必死に叫んだ。
「逃げて」と。
何が起きたのかわからない、私達は互いに目配せしながら首を傾げる仕草をして見せた。
そしてようやく私達の元へ駆け寄ったミドリが私の服の裾を掴むなり、息を荒らげながらミドリが走って来た方向へ向かって指をさす。何かを訴えようとしているのか、私とアヤはミドリが指さした方向へと振り向いた。

その瞬間、私達は反射的に走り出していた。
自宅とは全くの反対方向へ。
なぜならミドリが指さした方角は、まさに自宅がある方角なのだ。
そうでなければ全力疾走で自宅に避難し、今見たおぞましい光景を親に話している所だった。
だがそれが出来ないとなれば、学校内にある運動場へ逃げ込むしかないと、まだ幼かった私達はそう判断することしか出来なかった。
運動場には多かれ少なかれ誰かがいるはず、絶対に無人だったことなんてなかった。
走りながらもう一度後ろを振り向く。
するとさっきよりもかなりの勢いで迫って来る彼の姿が目に映った。

身長は中学〜高校生なだけに私達よりずっと長身で、体格は中肉中背、ぶくぶくに太っているわけでもガリガリに痩せているわけで

もない。黒髪の短髪、血の気が失せたような色白の肌、一重まぶただが凛々しささえ感じるようなキレ長の目、鼻筋は通っており、端から見れば割と整った顔立ちをしている。
しかし彼は常日頃から変わり者として周囲から見られていた。
私は彼のことをよく知っているわけではないが彼は突然奇抜な行動に出る為、あまり近寄らないようにしている。
それでも彼の弟とは仲が良かったのだが、彼だけはどうしても好きになれなかった。

彼はいつものように奇抜な行動に出ていた。
甲高い奇声を発しながら、私達が居る方向へと……いや、私達めがけて走って来る。
上半身には白いTシャツを着ていたが、そんな所はどうでも良かった。
私達は彼の全体の姿を見て恐怖し、逃げ出したのだ。
彼は何も穿いていなかった。
下半身を晒け出し、全くのフリーダムな状態で駆けて来る。
幼いながらに理解する。

あれは、変態だ！

華麗に駆ける姿ではあるが、何かが振り乱れる光景は今も忘れない。
へそより少し下に生えている黒い毛、その先に見える謎の物体。
当然じっくり観察する余裕なんてどこにもない、する気にもなれない。
私達は下半身を完全に露出させた彼から逃れるように、悲鳴を上げながら運動場へと続く通路をひたすら走った。
無我夢中で逃げた私達は運動場で遊んでいる人達を見て安心し、後ろを気にしながら足を止める。

肩で息を切らしながら目の前にいる誰かに助けを求めようとしたが、その必要性をすぐに無くしてしまった。
振り返った先に彼の姿はない。
私達が叫びながら逃げる姿を見て満足でもしたのだろうか？
それとも他に人がいる場所へ出て行くのを嫌がったのだろうか？
とにかく彼の姿はどこにも見当たらなかった。
必死で、とにかく死ぬ思いで走った私達は互いに目を合わせ……
その場で大きな笑い声を上げる。

「あはははっ！
やっぱりあいつ、本物の変態だ！」

おかしくて仕方がなかった。
本来ならあれは完全な犯罪、「公然わいせつ罪」とでも言うのだろうか。
しかしまだ幼かった私達は彼の行為に対して、お腹を抱えて笑い出していた。
露出行為に恐怖するでもなく、確かに目前に現れて追いかけられた時には恐怖していたが、今ではその恐怖感すら滑稽に思え、笑うことしか出来ずにいたのだ。

その日、彼に会うことはなかった。
私達の中に少しばかりの不安があったのは間違いない。
もう一度裏門へ続く通路へ戻った時、彼が待ち構えていないかと恐怖した。
しかし戻った先にも彼の姿はなく、私達は無事に自宅へ帰ることが出来たのだ。

不思議と、その日起きた出来事を母に話すことはなかった。
今日一日何をして過ごしたのか、そういった話題にすらならない。

確かに衝撃的な一日であったはずなのに、家に帰ることでいつもの生活に戻ったという安心感でもあったのか、何でもない一日だと認識してしまう。彼がおかしいのはいつものことだ。
今日も彼の変態的な一面を目にしたに過ぎない。
だって彼は、自他共に認める「変態」なのだから。
今更彼がどのような行動を起こそうと、私達が訴えない限り闇に葬り去られるだけ……。
そして今回の出来事も、「いつものことだ」という思いが彼の行動を「ただの遊び」だと認識し、許容してしまっている。
子供ながらに「あれはただふざけていただけだ」と、そう解釈してしまっている。
だからあえて親に何も話すことはなかった。

「あいつに今日、変なことされたよ！」

そう言っても、相手にされないと心のどこかで感じていたのかもしれない。
何を言っても取り合ってもらえないと、そう考えたのかもしれなかった。

だって彼は、周囲が認める奇人変人なのだから。
今更彼がどんな騒ぎを起こそうと、またかと軽くあしらわれるだけなのだから。
変態にも、ある種の特権があったんだ……。
その時の幼い私は、心のどこかでそう思っていた。

その出来事から数年、私は高校二年の時に大阪から京都へと引っ越した。
よってその後、彼がどうなったかは知らない。
高校をきちんと卒業したのか、大学へ進んだのか、それとも就職

したのか。
私は何も知らない。
特に親しいわけでもなかったので、連絡を取り合うことなんて有り得ないのだから。

彼はマトモになったのか。
それとも、変態を極める道でも選んだのか。
それは私にもわからない……。

電車内の変態さん

今回お話する内容は、私が高校生の頃……十八歳の頃に体験した変態さんとのエピソードです。
これは私が直接変態さんに何かされたというわけではなく、とんでもないものを目撃したというお話です。

＊

当時、私は母の再婚相手である義父の親戚が住んでいる奈良へと向かっていた。
義父の妹の子供が結婚式を挙げるということで義父、母、私の三人で電車に乗っていた時。
その日は土日休みのダイヤのせいか、車内はかなり空いており、車両の端の方に座った。
私と母は隣同士、そして義父は私の向かい。
車内の椅子の配置は窓際、両サイドに位置しているタイプ。
なので車両に乗っている乗客の様子は容易に見渡すことが出来た。

くだらない内容の話をしながらも、電車内ということもありあまり大きな声で話すことが躊躇われ、殆ど無言状態のまま。
時間を潰す為の道具も何も持って来ていなかったので、私は暇を持て余し、時折車内を視線だけでぐるっと見渡したりしていた。
義父は両腕を組んで居眠りしている。
勿論完全に寝ているわけではなく、恐らく義父も相当暇だったようで退屈凌ぎの為に両目を閉じているだけなのだろう。
母はというと、どこを見るでもなくただぼうっと座っていた。

視線はやはり私と同じように車内を見渡したり、窓の外の景色を眺めたり。

ふと、私は車両の一番端っこに座っている男性へと目が行った。
男は若くなく、恐らく四～五十代といった所だと推察する。
革製のジャンパーに、少し丈の短いズボン。
どこにでもいる普通のおじさんだった。
特に何かおかしいというわけでもなかったので、私は再び視線をそのおじさんから外して窓の外を眺めて気を紛らわせる。

各駅停車の電車に乗っていたので、何度目かの駅に到着する。
ドアが開き、乗客が入って来る。
だがそれも少人数で、全ての席が埋まることはなかった。
ぽつぽつと埋まって行く席、どこでも自由に座れる状態なので当然殆どの乗客は椅子に座るか、ドア付近に立ったりしている。
そんな時、私は奇妙な違和感を覚えた。
先程目に入った、何の変哲もないおじさん。
そのおじさんの目の前に一人の男性が吊り革を持って立っていた。
なぜその光景に違和感を覚えたのか、はっきりとはわからない。
ただ、なぜか私はそれがとても不自然に感じられたのだ。

車内はとても空いている、今だってどの席も座り放題。
椅子の端でなければいけないというこだわりがある人がたまにいるが、勿論端が空いてる席もあった。
ドアの側に立ちたいというのであれば、それも十分にある。
なのに吊り革を持って立っている男性は、車両の一番端の、既に椅子に座っている男性の目の前に陣取ったのだ。
それでも別に不思議に思う必要はなかったのかもしれない。
だが私の中にある何かのセンサーが、敏感に反応している。
気になって仕方なかった。

私は極力窓の外の光景を見るようにしながらも、時々端っこに陣取った男の様子を窺うことにした。

電車が走り出し加速する。

ちらりと視界の端に男の姿を捉えると、吊り革を掴んでいる男性……仮に男をAとしよう。

男Aは持っていた新聞紙を最初はほぼ丸める形で持っていたが、それを少し広げて持ち変えた。

まるで椅子に座っている男……彼のことも仮にBとする。

男Aと男Bとの間を、まるで周囲の視界から遮るような状態に見て取れた。

私は元々推理小説やサスペンス物が大好きだったので、そういった漫画や映画をよく見ていたものである。

それが災いしたのか、私は思わずある好奇心に駆られてしまった。

もしかしたらこの二人は、今まさに麻薬の売買をしているのではないか！？

途端にわくわくとした思いと、ハラハラとした緊張感が私を襲う。

そんな場面、テレビの中でしか見たことがない。

実際に出くわすなんて、そうそうないはずだ。

私は彼等を視界に入れる回数を増やした。

手に汗が滲んで来て、心臓の鼓動が徐々に早くなって行く。

そして私は目撃する。

男Aは車内に居る乗客から男Bとの間で行なわれる行為を見られまいとしているのか、新聞紙の角度は真っ直ぐの状態。

つまり真横にいる乗客からは見えないようになっているが、それはあくまで「真横の場合」のみであった。

真横にはかなり距離を置いて座っているが、義父が両目を閉じて

座っている。
だがしかし、その義父の向かいに座っている私からは新聞紙の角度は殆ど無意味に近かった。
車両の端、加えて真横から見られないよう視界を遮断する為、新聞紙によって完全な死角を作れたと思い込んでいるようだが、微妙な角度に位置している私からは二人の間にある空間はきちんと捉える事が出来ていた。

私は絶句した。
声も出せないとはまさにこういうことなんだと、実際に経験した。
私は二人にバレないように視界の端でさり気なく捉えるということを忘れ、殆どじっくり観察するように凝視していた。
今自分の目に映っている光景が本当に、現実に繰り広げられているものなのか、それを確かめる為に。
信じられなかった。
まさか不特定多数の人間が乗り降りするこの車内で、まさかこんなことをする人間がいるなんて。
ショックを受けながらも私は出来る限り顔は正面を向くように、だが目線だけは男Ａに釘付けの状態で眺めながら心の中で叫んだ。

（おかーさーん！
おっちゃんの社会の窓からまつたけが生えてきてるよー！
新聞紙で隠そうとしてるけど、まつたけが丸見えだよー！）

しかし車内は静寂に包まれており、ひそひそ話でも相手に聞こえそうに感じてくるので隣にいる母に向かってそれを告げることが出来なかった私は、過去に同じようなまつたけを見たことがあるような気がしながらも、男達の様子を窺い続ける。
そもそも男Ａは一体何がしたいのだろうか？

股間から露出してるものを見せている相手は、男なのに！？
普通そういう行為は嫌がる女性に向けてするものじゃないのか？
どこからどう見ても椅子に座っている人は男性以外に見間違えるはずがない。
しかも車内に何人か女性がいるというのに、ただ端っこに座っているというだけでターゲットにしたのだろうか？
何かが間違っていないか？
それとも私が間違っているのか？

疑問符が私の頭の中を支配する。
何がどうなっているのか、男Ａの目的が全くわからないまま私が男の行動を瞠っていた時……。
更に信じられない光景を目にすることとなる。

なんと椅子に座って目の前に男性の性器を見せつけられている被害者の男Ｂは、何を思ったのか……。
男Ａの男性器に片手でそっと触れ、撫で始めたのである。
それをはっきりと目撃した私は更なる衝撃を受けた。

（おかーさーん！
おっちゃんの股間から誕生した亀さんの頭を、おっちゃんが撫で撫でしてるよー！）

これは一体何なのか？
私は何を見せられているのか、彼等は何がしたいのか？
わからない、わからない――――。
理解に苦しむ私は気分が悪くなり視線を逸らした。
出来るだけ視界に入らないようにうつむき加減にして、恐怖で身が縮まる思いだった。

ようするにあれですか？
両想いですか？
最初から待ち合わせして、そこであんなことをしようって約束でもしてたのか？

（だったら余所でやれよーっ！
わざわざこんな公共の乗り物の中ですることじゃねぇだろーっ！
ホテル行け、ホテルー！）

私はだんだん腹が立って来た。
最初は男Ａが痴漢、あるいは変質者として男Ｂに卑猥な行為をしているものと思っていたからだ。
それが事実はどうだろう。
被害者だと思っていた男Ｂまでそれに乗り、二人一緒に楽しむとは何事だろうか。
しかも純粋で清廉潔白で純真無垢な私の目の前で、あんな汚らわしい物体を見せつけ、なおかつ使用方法まで披露するとは！

胸の奥がむかむかしてきた私はさすがに我慢出来なくなり、隣に座っている母にこのことを知らせようとした。
幸いなのか最悪なのか、向かいで眠ってる義父は少し離れた距離にいる男達の行為に気付いていない。
変質者は警察に突き出さなくては！
そう思った私は母の袖口を軽く引っ張り、出来るだけ小さな声で男達に気付かれないように話しかけた。

「ねぇ……、あそこ……ほら。
あの二人が端っこで変なこと……」

「見たらダメよ、知らんぷりしてなさい！」

厳格な口調でそう告げた母。
あまりの即答に、私は思わず唖然とした。
最後まで説明することなく、私が何を言いたいのかを素早く理解し、対処法を私に伝えた。

（気付いてたんかい、おかーーんっ！）

結局母の言う通り、私は二度と男達がいる方向を見ないように真っ直ぐ……あるいは反対方向を見るようにして、一刻も早く目的の駅に到着するように祈り続けた。
駅に到着するなり私も母も足早に電車から降りて行く。
勿論義父は何も気付くことなく、何の問題もなく私達と一緒に電車を降りた。
その後あの二人が最後までしてしまったのかどうか、私はその結末を見届けることは出来なかった。

いや、見届けたくもなかった。

あの二人の目的は一体何だったのだろう。
本当に偶然、二人ともが変質者だったのだろうか？
それとも男Ｂは私の見えない所で脅されて、男Ａのものを触るように強制されたのだろうか？
腑に落ちない、本当に納得が出来ない。

「世の中、現実で起きることの方が予想出来ない」というのは本当のことだと、それだけは理解出来た。
だから何だと言うんだろうか。

ともかくこの私が男性に対する嫌悪感を抱いたのは、こういった

経験の連続によるものかもしれない。
そしてこれはその序章に過ぎないのだということを、私はもっと後で知ることになる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5938p/

変態と私

2010年12月20日20時26分発行